

死を覚悟して旅した芭蕉

三年生の皆さん、前回お知らせしたとおり、今日は松尾芭蕉について書きますね。皆さんは旅は好きですか。今はコロナウイルスの関係で外出自粛だから無理ですが、若い皆さんには、将来日本や外国を巡って見聞を広めてほしいと願っています。

さて、その旅ですが、皆さんの旅と芭蕉の旅はずいぶん違います。もちろん江戸時代には移動手段としては、自分の脚が頼りです。何ヶ月もかけて、ずっと歩いて旅をするのです。旅の手段や期間の違いではなく、覚悟の違いというものが芭蕉にはあると私は思います。

皆さんの旅は、自宅を出て自宅に帰って来ますよね。芭蕉は違うのです。教科書に載っている紀行文（旅の記録）「おくの細道」の旅は、江戸（今の東京）の深川を出発して、北関東、東北、北陸を経て岐阜県の大垣で終わります。江戸には戻らないのです。

「家はどうなってしまうの？家族は？」そう思った人もいるでしょうね。芭蕉は奥さんと呼べる女性はいなかったようです。芭蕉自身の子どももいませんでした。旅に出たくて出たくて仕方がなかった芭蕉ですから、面倒を見なければならぬ家族はいなかったのでしょうかね。

家は……というと、ありましたよ、江戸の深川に。しかし、「おくの細道」の中には次のように書かれています。「住める方は人に譲り」これは、自分の家を人に譲ってしまったということですよ。この時点で、帰ってくる家がないということ、芭蕉は江戸に帰ってこようとは思っていませんでした。

当時は、旅人から金品を奪い取る盗賊もいましたし、当時の人間の寿命が三十〜四十歳の時に、芭蕉四十半ばの旅立ちでしたので、恐らく途中で死ぬことを覚悟しての旅立ちだったと思われます。

どうですか。単なる「旅がすき」程度の人間ではないようですね。なぜ、芭蕉は旅に出たのでしょうか。当然こういう疑問が生まれてきます。それは休校が明けてからの授業で、田中先生と突きめてみてくださいね。おもしろいよ。

もう一つ、「先立つもの」はあったのでしょうかね。お金ですよ。旅って金がかかるでしょ？芭蕉はどうだったのかな。これまた、興味津々だね。



（五月四日の分）